有機農業の取組事例⑩　（常陸大宮市：小口氏）

ヨーロッパのブドウ畑をイメージしたブルーベリー農園

農薬や化学肥料を使用しない有機栽培で、「獲れたての味」をその場で楽しめるブルーベリー観光農園、そして、農園自体を観光の拠点にした取組を展開しています。

◆ 経緯等

・水戸京成ホテル（総支配人）で、食（地産地消）にも携わってきた
　→定年後は、「農業」と「観光」を軸にした取組をやってみたいと考えていた

・定年から逆算して、（５１歳の時に）１０年計画で農園整備に着手
　→働きながらも、ブルーベリー農家（かすみがうら市：坂農宛）で栽培技術を習得
　　スタート時は、10aの畑で、200本のブルーベリーを植え、４年間は実をつけさせずに、丈夫な根を張らせた木づくりをした
　→開園の３年前から、ホームページ、facebookを開設し、広報PR活動を開始
　→開園の１年前には、「無料での収穫体験イベント」を開催

・２０１５年　定年と同時に、「ブルーベリーフレンドファーム」開園
　→コンセプト：「おいしい有機栽培のこだわり完熟ブルーベリーを栽培しています」

ブルーベリー　コミュニケーション　＆　コラボレーション

ブルーベリーがきっかけになって、様々な人々がつながったり、知恵を出し合ったり、来てくださった方々が楽しめる地域づくりを目指す

➡ 農業だけでは人は来ない。カフェもあることで人も来る。
ホームページで情報を発信する。来てくれた人の口コミでさらに広がる。
東京に売るという意識（感覚）を持つ。また、交流人口も増やしていきたい。

□ 参考

・ブルーベリーの旬は、６月から８月の約３か月。交流人口を増やすには、シーズン外にも提供できる、ブルーベリーの商品開発も必要。
　→（県補助金の活用）品質を保持するための冷蔵庫や、冷凍保存するための冷凍庫の導入、さらに、カフェのオープンで、通年で加工品を提供できるようになった。

～小口氏からのコメント～

・現在は、約1.2haの畑で、約40品種（約3,000本）を栽培している。
　→リスク分散（気象災害等）の観点から、多くの品種を栽培している。また、作業ピーク時期の分散（負担軽減）の観点だけでなく、訪れてくれる多くの顧客に、出来るだけ長い期間、摘み取り可能となるように、多くの品種を栽培している。

・県北のような過疎地域における農業は、「観光」との掛け合わせが大事。
　→カフェを併設し、「特製ブルーベリータルト」なども提供している。また、6次産業化（生産、加工、販売）も進めた。「ブルーベリーあんソース」は、他にはない商品（をつくっている）。実際には、加工品販売はビン詰めなどのコストもかかり、儲かるわけではないが、価値の向上やブランド化を考え、また、収穫期以外にも収入を安定的に確保できるようにと考えている。

・開園当初は、周りの人から、「こんな山に誰が来るんだ」と言われたが、多くの方が来てくれた。むしろ、市外からの遠くからの人が多い（約8割）。
　→情報発信は大事。ホームページに掲載しておけば、見ている人は見ている。実際に、ある有名人（俳優）のブログでも紹介してくれたことで、注文が殺到したことも　あった。（あまりマイナス的に考えず）県北には潜在的な魅力と可能性がある と思う。また、こだわりを持って色々と取り組んでいる人もいるはずなので、そのような人の紹介も含めて、情報を発信し続けることが、今後の県北地域の活性化にもつながると思う。